

最後の面会

福田哲也

パソコンの別画面に一枚の写真を開き、時折それを眺めながらこれを書いている。生前のC・W・ニコルを写したおそらく最後の写真だろう。黒姫の彼の家の玄関先で〇月〇日に撮られたものだ。その翌日体調を急変させたかつてのボスは、四日後旅立った。

私と家内、それにこの春、高校・大学へと進学する二人の娘と一緒に写っている。信州大学の四年生になる長男は、学業の傍ら経営しているジビエ居酒屋の仕込みがあるとかで、長野市までは顔を見せに来たものの、黒姫まで足を延ばすことなく早々にキャンパスのある伊那市へ戻っていた。ために彼だけこの写真に写っていない。それでも、家族そろってこの地を訪れるのは、十二年ぶりのことだ。当時まだ幼かった子供たちにとってニコルさんは、「リングゴのおじちゃん」であり、三歳だった下の娘などはサンタクロースだと信じていたものだ。彼がいわゆる著名人であることを知るのは、私の故郷である長崎に家族で移って数年を経過してからのことである。

上の娘が四国の大学に決まった一月半ばの時点で、三人の子供たちが初めて別々の地で暮らすことが本決まりとなり、下の娘の高校が決まる三月末に、一度彼らの生まれ育った妙高高原や黒姫高原を訪ねて懐かしい人たちに会いに行こうという計画を立てた。途中、東京の病院にいるニコルさんのお見舞いも旅程に入れていた。

それに先立つ一月末、私は一人で彼の病床を見舞った。私がかいたかったのと彼にも私に言いたいことがあるようなことが、電話での会話で察せられたからだ。その時の私たち二人の様子は、お互い歳を食った以外、黒姫で一緒にいた頃と少しも変わらないものだった。開拓者のたくましさや物書きの繊細さを併せ持つ彼が、私に主に見せていたのは、前者のほうだ。後者の顔を見せる人は別にいた。癌などという病気を得てしまうと、なおさら両方の存在が必要だろうと想像するのだが、その意味で彼は最後まで恵まれていたといえるかもしれない。

「英治も死んだ、フレッドも死んだ。この世もさびしくなったもんだ。だから僕は死ぬことは少しも怖くない。」

彼はそんなことを言った。それでいながらこれからやろうとしていること、それがどれほど展望のあることかを熱く語った。そして、少しばかりの愚痴をこぼした。それはおそらく思うに任せない自身の肉体への愚痴を裏返したものだかもしれないのだが、それ

にしてもすべては昔と少しも変わらなかった。そして私もかつて専ら愚痴のなだめ役であった頃のままで言葉を返した。

「開拓者というのはたぶん一代限りのものなんです。後に続くものはよき耕作者であることしかできないんだと思います。それだってもものすごく大切な役割だと思いますよ。」

ニコルさんのほうでもきつと

「こいつも相変わらずだ」

と思いつながら聞いていたことだろう。

「また黒姫と一緒にやらないか」

という誘いには、年老いた母を引き合いに出して丁重にお断りした。実のところ私はその「よき耕作者」である自信が全く無く、また自分が種を植えようとする地は、自分の手で耕したいという気持ちが強かった。たとえ手にしているのがどんなにちっぽけな畝だとしても。

私は、三月末に今度は家族で会いに来ることを約束して別れた。

それからすぐに、新型コロナウイルスの騒動が大きくなり、本人の家族でさえも面会できない状況になってしまった。三月に入ると彼を見舞うことはすっかりあきらめねばならなくなった。ところが、出発の前日、黒姫の知り合いから、「昨日ニコルさんが退院して今黒姫にいる」と知らせが入った。すぐにアフアンの森財団のMさんに連絡を取った。Mさんは長年ニコルさんと二人三脚で歩んできた人で、ニコルさんがアシスタントを募集した時私を選んでくれた人でもある。一月の見舞いも、Mさんから「今のうちに会っておいた方がいい」と言われたのもあったことだった。今回もMさんは「ニックもみんなに会いたがっている」と言ってくれた。私は、「天皇陛下がやるみたいなのに、庭に面した大きなガラス越しに手を振りあって、電話で話そうよ。」と提案した。もちろんコロナのリスクを考えてのことだが、「ニックはそれじゃ気が済まない、部屋でお茶をご馳走したいといっている」とのこと。私もMさんもそれはいくらなんでも危なすぎるということで、その辺はあいまいにしたまま三月二十八日に長崎を発った。

その日は、現在長野市に住む長男の幼馴染のお宅へ泊まらせてもらったのだが、その晩大雪が降り、翌朝黒姫に向って山道を登るレンタカーの車中、子供たちは、本当に懐かしい雪の信州を思いがけず心ゆくまで堪能した。我が家で彼らだけが感じ取ることのできる雪のにおいに「懐かしい」を連発していた。

ニコル家での面会は、間をとって玄関先で、短時間だが直接顔を合わせるということになった。子供たちはすっかり痩せてしまったリングゴのおじちゃんに多少びっくりしたかもし

れないけれど、私には東京の病床で見た彼より、目にも、体にもずっと力がこもっているように感じられ、「やはり、この人は黒姫の赤鬼なんだ」と感じた。Mさんによると黒姫に戻ってからの数日、たいそうな健啖ぶりを見せながら、「これから、あれをやる、これを書く」という構想をたつぷりと語っていたそうだ。Mさんは、「てっちゃんの小屋にも行こうね」と語りかけてくれた。私はあるテレビ番組をダビングしたDVDを渡した。黒姫に戻ることを断った詫びのつもりで用意したものだ。彼が私にやらせたいと思ったことに、私以上の適任者と思える人物が取り上げられていた。

冒頭で述べた写真は、このときMさんが撮ってくれたものだ。翌日は予定していた病院での検査ということだったので、私たちはアフアンの森で好き勝手に遊ばせてもらうことを許してもらい、ニコル家を辞した。長居は無用だった。翌日、ノルディックスキーを履いて、私の原点の森を歩き回った。保育園のころゲレンデをすいすい滑っていた上の娘は、すっかり滑り方忘れてしまっていた。却ってほとんどスキー経験のない下の娘のほうが上手に滑っていた。

それぞれの懐かしい友人たち、山の親方、初対面の馬たちとも短すぎず長すぎず時を過ごすことができた。雪不足が恒例化している昨今、この時期にどか雪が降ってくれたことと言い、ニコルさんと会えたことと言い、誰かがプレゼントしてくれたという風にしきりと思われた。私は、この旅が終わって長崎に戻ったら、『山も森も変わることなくそこにあった。ただ人と人の作ったものだけが歳をとった』そんな風なことを書いて旅を総括しようと考えていた。未だ余韻のないうちで写真の整理も始めないうちに、それをもっとも強烈な形で再び味わうこととなった。ニコルさんはそのまま病院から戻らずこの世を去った。一度だけ「親父殿」と呼ばせてもらって手紙を送ったことのある彼は、実の父と同じ長さだけ生き、そして死んだ。

心の準備はできているつもりでいた。しかし、いざそうなってみるとやはりこたえた。財団関係者で最も親しくしているKさんが、「奇跡でしたね」と言った。確かにそうかもしれない、タイミングはあの一日しかなかったのだ。心の穴を埋めるといふわけにはいかないけれど、それでもずいぶんと救われた。

昔のボスが歳をとることをやめ、そして私は今日また一つ歳をとる。